

「縮小社会への道」オンライン茶話会 第10回

大都市から地方(辺境)へ その可能性はあるか・・・

人社会の苦難を他所に、桃や菜の花が開花を競う季節が来ます。写真は「桃源郷」をイメージ（ノスタルジック）しますが、こんな風景が過去の日本の地方にあったように記憶します。この半世紀、人びとは、大地に根差して暮らしていた地方からコンクリートとアスファルトの大都市へ流出して行きました。その主な原因は、自動車などの工業製品の輸出を優先するがために、食料の供給を海外に委ねた国策の結果、第一次から第二次・第三次産業に労働力が移動したからでした。そんな中、突如襲ってきたのが、「新型コロナウイルス」によるパンデミックです。皮肉なことに、



これには「濃厚接触（3密）」を回避することが、有効な対処法といわれます。今後の半世紀は「大都市から地方（辺境）へ／濃厚から農耕へ」の流れができるのではないかと微かな希望を抱いています。過疎化、限界集落、消滅集落、耕作放棄地などの言葉を聞きます。原発が何故過疎地（辺境）を好んで建設されたか解る気がします。「空想」で終わるか「現実」となるか、「そこで飯が食べ家族を養えるか？」が必須です。政治の力で米を主食とした食料の自給率を100%に回復することで、それは可能ではないかと考えます。「食料は輸入できても、風景は輸入できません」という方がおられます。「種子法」や「種苗法」などの健全な復活をして、中山間地であれ、扇状地であれ、稲作を主体とする四季折々の里山風景は、この国に生きていく私たちの「宝」です。もちろん林業も輸入木材を止めて国産木材を、建築、家具、薪、炭焼きなどで活用することで、中山間地の農家も農と林を兼ねることで収益に寄与します。それは、江戸時代に回帰することでもなく、半世紀前の日本に回帰するわけでもなく、パソコンもスマホも活用する環境の中での話です。そもそも、人々が地方に暮らす目的は、米を主食とする家族の食料を自給するために、広大な農地（土と水と空気と太陽）に分散する必要があったからです。そんな「夢」物語に、当会の小川さんが道案内してくれます。時間の許す方は、是非この茶話会にご参加下さいませ。

話題提供：小川正嗣さん（縮小社会研究会会員）

【小川さんから】近年の日本の相対的貧困率を見ると、約15%にもなっています。それにも関わらず、ここ1年の日本の貧困は、新型コロナウイルスの影響でさらに深刻さを増してしまいました。一方で、田舎を見ると、農業などの一次産業に就く人が減り、人手不足で困っている地域はたくさんあります。これらは、高度経済成長期に地方から街中へ多くの人々が移住した歪みであると言えます。今まさに、「都心からローカルへ」が求められる時代へと、時代が移り変わっているのではないのでしょうか。この日本の歪みを少しでも是正することができれば、それは「縮小社会への道」の第一歩となると思います。

日時：3月19日 14:00～(90分) オンラインZOOM

<https://us02web.zoom.us/j/83822713345?pwd=aG1IbTd4RkF0SHQ5Y01tTjhndkQxUT09> パスコード：74320

主催：「縮小社会研究会」明阪神 Gr.

非会員の方の参加も歓迎です。事前に氏名・所属などを高橋まで連絡願います。参加費：無料

連絡先：高橋精巧 bugad205@hi-net.zaq.ne.jp 090-5886-8364